エッカーマンについて

——「ゲーテとの對話」をめぐつて——

田川基三

ゲーテの同時代者たちによつて記録されたゲーテの想い出や言行錄のたぐいはまことに數しれず Biedermann の編集した Goethes Gespräche 5 Bde. について見ても、そこに名をつらねている人々の數は數百を下らぬ有様であるが、試みにいま書物となつて出ているものの主なものをあげるならば、Eckermann: Gespräche mit Goethe をはじめとして、Johannes Daniel Falk: Goethe aus näherem persönlichem Umgange dargestellt. 1832; Goethes Unterhaltungen mit dem Kanzler von Müller. Hrsg. v. Burkhard. 1870; Friedrich Wilhelm Riemer: Mitteilungen über Goethe. 1841; Friedrich Jakob Soret: Zehn Jahre bei Goethe などが考えられるであろう。これらの人々はゲーテとの關係の違いや、その筆錄の意圖の異なるにしたがつて、それぞれ獨自の特色ある記錄をのこしている。たとえばフォン・ミュラー翰長の „Unterhaltungen“ は簡潔な日記であり、リーマーの „Mitteilungen“ は、ゲーテの「ヴィンケルマン」にならつて、それぞれの項目にわけて分類整理された記錄である。しかし、エッカーマンの「ゲーテとの對話」ほど、まとまりのある感銘を讀者に與えるものはなく、それはドイツ本國のみならず全世界にわたつて、またゲーテ研究家のみならず廣く一般讀者層に

も、今日に至るまで親しまれている。ちようど影の形にそうように、ゲーテが論じられるところでは、きまつてこの書物が姿をあらわし、まるでゲーテの註釋か索引のように、隨時隨所で適切な言葉が取り出される。この意味でエッカーマンは、彼自身の詩作によつてではなく、ゲーテの代辯者として堂々とドイツ古典主義作家に伍していると言うことが出來る。また一人の偉人への最も誠實な傾倒の模範として、「エッカーマン」という一つの概念をさえつくり上げている。

「對話」（以下このように略記する）の價値はゲーテの生涯の多彩な姿を、ことに晩年の圓熟しきつた詩人の生活を、われわれの眼のまえに見事に繰りひろげてくれる點にある。しかし、この本のそのような不變の魅力、不動の價値のよつて來るところが、この書物の中心に立つゲーテの偉大さにあることはいまさら言うまでもない。「對話」を讀むと、われわれはさながらゲーテ家に親しく足を踏み入れ、そこここの部屋のすみずみを見てまわり、また彼の作品、彼の構想、彼の思想の內側までも覗きこむ感じがする。エッカーマンの描いているゲーテは、もはや不羈奔放な若い日のゲーテではなく、七十歲から八十歲にかけての圓熟しきつて象徵の域にたつしたゲーテの姿である。「對話」が世に出た頃（一八三六年）は、ちようどドイツの大部分の者が、あわただしい價値轉換に心をうばわれて、もはや「ファウスト」の詩人に對して忠誠をつくすことを忘れはじめた時であつた。しかも、この老年のゲーテの姿がなお後世に人氣を呼び、今日までもわれわれの間に生き續けている。

エッカーマンが、はじめて胸をときめかせながら、フラウエンプラーンのゲーテの家に足を踏み入れ、ゲーテの親切な應待ぶりにすつかり感激して、「生涯の最も幸福な日」と思つた瞬間（一八二三年六月十日）から、ゲーテの死の翌日（一八三二年三月二十三日）師の遺骸のかたわらに立つて、しばし感慨にふけつたあの感激的な瞬間に至るまで、そこにはつねに變らぬ師に對する弟子の崇敬と、讃歎と、愛情とがあつた。

*

エッカーマンとゲーテとの出會はまことに宿命的な出會であつた。エッカーマンの生涯にとつては實に運命的な轉機であつたと言わねばならない。時に七十四歳の詩人ゲーテは、いわば過去にのこした幾多のすぐれた作品の重荷のもとに喘いでいた。内的にも外的にも、生涯の清算の時機に直面していたと言うことができる。何よりも秩序を愛し、几帳面なゲーテは、社交や公務にわずらわされて仕事の餘暇の得られぬ惱みを持つていた。ちようどその頃、ゲーテの決定版全集（Goethes Werke. Vollständige Ausgabe letzter Hand 40 Bde.）出版の計畫があり、それに關してしなければならぬ仕事は山ほどあつた。ことに當時のゲーテの思想、感情とは全く距つてしまつた、ごく初期のものを整理しなければならなかつた。そのために、このような仕事を興味をもつて處理してくれる若い人の手が是非とも必要であつた。ゲーテは絶えず心にかけてこのような人をさがしていたが、なかなか適當な人が得られなかつた。ゲーテが最も有望な助手と考えていたのは、Karl Ernst Schubarth という若い學徒で、一八一八年に „Zur Beurteilung Goethes“ という書物を出していた男である。教養もあり頭もよく、この仕事には最も適當な人物と考えられたが、生活の保障やなにかを考えると、彼をわざわざワイマルへ呼び寄せる決心がゲーテにはつきかねていた。ちようどそこえ飄然と姿をあらわしたのが、遍歷文學徒弟とでもいうべき三十一歳のエッカーマンであつた。そこで、シューバルトの役は彼に振り當てられることになつた。彼は教養の點ではもとよりシューバルトにかなわなかつたが、持前の勤勉と忍耐力とで、あらゆる障害を排除したのである。たとえ學識の點では劣つていても、ゲーテに對する深い心からなる傾倒の點では、彼は何人にもおくれをとらなかつた。このシューバルトについては C. G. Carus がその印象を „Er hat viel Geist,

aber, fast möchte ich glauben, sehr wenig Liebe.“ と述べているが、エッカーマンは實に Houben が言うように、バイブルの „Die Liebe höret nimmer auf.“ という言葉がそつくりあてはまるような男であつた。

エッカーマンの半生は「對話」の緒論のなかで彼自身が語つているように、まことに痛ましい苦闘の連續であつた。彼は北ドイツの Hannover 州の Winsen という一寒村に貧しい行商人の子として生れた。彼が牛飼や、畠仕事をして幼年時代をすごした家庭は、藝術とか教養とかいうものからは、およそ縁遠い世界であつた。しかし、あるとき父が町から買つて歸つたタバコの袋に描かれてあつた馬の繪によつて、彼の藝術的開眼はなされた、と彼は語つている。やがて、ある人の好意で語學や音樂の教育をうけるようになり、後には司法書記をしたり、自由獨立戰爭に志願したりなどしたあげくに、とにかく大學に學び、ついには文學で世に立とうと決意するに至つた。そして詩をかき、ゲーテに沒頭したあげく一八二二年、ゲーテへの崇敬を基とした論文 „Beiträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe“ を書き、これをゲーテのもとに送つて（一八二三年五月）出版の世話を乞うたのが、そもそもゲーテとの交渉の動機であつた。彼はこの論文を「特に若い人たちの創作に對してばかりでなく、文學作品の理解に對しても寄與しようと望んで」書いたのであつた。

こういうわけで、エッカーマンはワイマルに住みつく意志は元々持つていなかつた。ゲーテに會つた後は何處かで創作の勉强をしようと考えていた。しかしゲーテの魅力は彼をとらえ、ゲーテもまた青年エッカーマンに心を惹かれたのである。そして、ゲーテが彼に對して何くれとなく示した心づかいは、まことに親身も及ばぬものであつた。エッカーマンは、ゲーテに會う以前にもすでに手紙をかき、詩集を送つていたが、詩には大して才能を認めなかつたゲーテも „Beiträge zur Poesie“ を讀んで彼の才能に心を惹かれたらしく、„So etwas liest man gern. Große Klarheit, Fluß der Gedanken, alles tüchtig durchdacht, schöner Stil.“ という感想を

もらしている。そして、これこそかねて自分が求めていた協力者（Mitarbeiter）となる資格をそなえた青年だと考えた。ゲーテがこの論文を讀んでうれしく思つた點は、ゲーテの思想が豊かに正しくとり入れられているばかりでなく、ゲーテがただ暗示するにとどめたものを更に發展成長させていて、それが全くゲーテの意圖と合致する點であつた。即ちエッカーマンは、ゲーテに對する崇敬の念ばかりでなく、同時に感受性と智性とを合わせ備えたところの、ゲーテのいわゆる理想的な讀者（der ideale Leser）であつた。またエッカーマン自身の言葉を用いるならば生産的な讀者（der produktive Leser）だつたのである。ゲーテは、はじめてエッカーマンに出會つた翌日の一八二三年六月十一日に C. F Schultz に宛てた手紙のなかで、彼の第一印象を „ein gar guter, feiner, verständiger Mensch“ と述べている。また翌年の二月四日付の C. G. D. Nees von Esenbeck 宛の手紙には „Seine Neigung zu meinen Arbeiten und die Übereinstimmung mit meinem Wesen überhaupt trägt mir schöne Früchte, indem er mir, zu einer neuen Ausgabe, ältere vorliegende Papiere sichtet…. Eine freie Übersicht und ein glücklicher Takt qualificiren ihn zu dem Geschäft, das ihm zugleich Freude macht.“ と書いており、また同年八月二十日には、自然科學上の友人である E. J. D'Alton 宛の手紙のなかで „Eckermann hat sich mit reinem Gemüt und hellem Geist an mein Wesen und Wirken angeschlossen.“ とエッカーマンのことをほめたたえている。

„Beiträge zur Poesie“ はゲーテの盡力によつて Cotta 書店から出版されることになつた。エッカーマンは非常によろこんだ。ゲーテはそのほか何くれとなく彼に好意を示し、彼が行くつもりだつたイェーナでの便宜をはかつてやり、その他こまごまと注意を與え、配慮を惜しまなかつた。彼にはこの好意が身にしみてうれしかつた。ゲーテにしてみれば、この時すでに、エッカーマンをなんとかして自分の協力者として、ワイマルに引き

とめる考えがあつたからである。嚴密にいえば、エッカーマンに會う以前からすでに、おぼろげながらこのような意圖をゲーテは抱いていたらしく、會つてみての好印象にいよいよ決心をかためたのである。しかし、エッカーマンは „Beiträge“ のようなものは早く卒業して、何處までも創作に向いたい希望を抱いていたので、ゲーテとしても早速その話を切り出すわけにも行かず、まず色々の仕事の手傳を依頼したりなどして、長く引きとめようとつとめ、ついにエッカーマンをワイマルに住まわせることに成功した。しかし、これはゲーテの功利主義とばかりは言えないであろうし、エッカーマンとても仕方なくゲーテに屈服したわけではない。ゲーテに自然にそなわる偉大な魅力が結局そうさせたのであろうし、結果的に言えば、こうなるのが兩方にとつて幸いだつたかもしれぬのである。

*

さて、ゲーテはエッカーマンという得がたい協力者を手に入れたものの、それをいつたいどのように用いたのであろうか。ゲーテはエッカーマンに、主として決定版全集のための原稿や書簡の整理や、その他いろいろの仕事の手傳いをさすと同時に、また自分の相談相手にしようと考えた。しかし、彼によつて自分の談話が記錄されるようになろうとは、まだ思つてもみなかつた。エッカーマンも、ゲーテのもとに止まろうという考えを抱くと同時に、直ぐ「對話」の執筆を計畫したわけではない。彼はゲーテのもとにたびたび出入りしているうちに、如何に自分の智識が乏しいかを痛感した。不十分な學校教育しか受けず、ほとんど獨學でやつて來た彼は、ゲーテのような精神的巨人に向うと自分をまるで侏儒のように感じた。そして、ゲーテのもとでどんなに豊富な知識と教訓が得られるかを知つた。そこで彼は、一八二三年から二四年にかけての冬の間にゲーテのもとで見聞したこ

とを書きとめにかかつた。はじめは何の意圖もなく、ただ日々の出來事を記錄したにすぎない。許嫁の Johanna Bertram に宛てた日記風の手紙や、エッカーマン自身の日記（その斷片、一八二四年二月二十五、二十七、二十九日等の日記が遺稿中に發見されている）などに書きしるしたのである。しかし、やがてこれらの記錄を一冊にまとめてみようという考えを抱くに至つた。しかし、それがはたしてエッカーマン一人の考えによるものか、それともゲーテの勸めによるものかはわからない。一八二四年二月十五日には、それまでに書きとめた談話をゲーテに見せた事實がある。その日のゲーテの日記に ,,Eckermann brachte die ersten Jahre der Chronik wieder und die aufgeschriebene frühere Unterredung" とある。一八二五年、二六年になると、すでに二人の間で出版に關する相談がなされたことが簡單ながら日記などでうかがわれる。またエッカーマン自身も、一八二五年六月六日の許嫁への手紙で次のように書いている。,,Meine Arbeit rückt langsam vor, aber es wird auch etwas sehr Gutes. Goethe, dem ich vor einigen Tagen die ersten Gespräche zeigte, ist sehr erbaut davon und findet die Arbeit vortrefflich. Ich werde damit sicher ein großes Glück machen und nicht allein in Deutschland, sondern auch in Frankreich und England dadurch einen guten Namen bekommen."

さて、出版することは決定されたものの、その時機に關しては、はじめゲーテは明言をさけた。一八二六年の五月になつてエッカーマンがその出版をせまつたとき、はじめてゲーテは「まず決定版全集を出すことが肝心である。次にはシラーとの往復書簡を出したい。對話の出版はその後だ」と答えている。これによつてゲーテの意圖はほぼ明らかとなつた。即ち、「詩と眞實」（一七七五年まで）、「年代記」（一八二二まで）に續くゲーテの最後の生活記錄を「對話」のかたちでのこそうというのである。ゲーテは、それまで書き續けてきた「年代記」

を、もはやそれ以上續けることが困難なのを感じて、その先をエッカーマンに書かせようと考えた。こうして彼は、ゲーテが筆を擱いたところから先を書き續けることになつた。ゲーテはこれによつて、創作により多くの力を注ぐことが出來たが、一方エッカーマンは、このために自己の文學活動を完全に斷念せざるを得なくなつた。一八三〇年十月十二日にエッカーマンが再び「對話」の出版の話を持ち出したとき、ゲーテは最後の斷を下した。„keine Veröffentlichung vor meinem Tode!“ しかしゲーテは自分も今後は「對話」に目を通して出來るだけ完全なものにしようと約束した。

エッカーマンがどういう意圖のもとに「對話」を書いたかは、第一部の序を讀めばほぼ理解することが出來る。彼は大體つぎのように書いている。「それは價値ありと思われ、注目に値すると考えられた經驗を、文章に書いて理解しようとする、私固有の自然的衝動から生れた。私は絶えず彼から教えを得る必要があつた。そこで好んで彼の言葉の要點を書きとめたが、それは將來のために保存しようと思つたからである。また私は、この對話が人生や藝術や學術につき、多くの說明と多くの貴重な教訓を含んでいるばかりでなく、さらにこのような現實生活についてなされた直接のスケッチが、すでに人々が彼の樣々の作品から想像している彼の面影を完成するのに、特に寄與するであろうと考えたからである。」はじめはこのような極めてつつましい意圖を抱いていた彼も、仕事をすすめて行くうちに次第に自信をもちまた自惚もまして來て、自分の目ざすところはドイツの文化の現在の狀態に有益な影響を及ぼすことにある、と言うようになつた。

ところで「對話」の執筆にあたつて、何か手本となつたものがあるかというと、先ず考えられるのは當時すでに書かれていた Falk の „Unterhaltungen“ である。しかも、エッカーマンとファルクとは親しかつたから、エッカーマンがこれを讀まなかつた筈はない。また Las Cases の „Mémorial de Sainte-Hélène“ をゲ

ーテが一八二三年に讀んだ事實があり、また Thomas Medwin の „Journal of the Conversation of Lord Byron“ は一八二四年以來たびたび ゲーテ家の談話の對象となつている事實からして、エッカーマンがこれらの書物からなんらかのヒントを得たことは容易に想像される。

こうして第一部、第二部の出版されたのは一八三六年になつてからであつた。エッカーマンが出版を急いだ理由のひとつは、當時のドイツ文學界の情勢から、「對話」の出版は早いほど有利だと考えたからである。が事實はそうではなかつた。讀者は青年ドイツ派の論爭に氣をとられて、「對話」の如きものにはあまり注意を向けなかつた。しかし、一部のものは大いによろこんでこれを迎えてくれた。不愉快な現在の騷ぎをよそに、美しい過去の世界にひたりたいと考える人たちもいないわけではなかつた。

*

「對話」に對しては、その出版當初から樣々の批評がなされた。それは必ずしも讃辭ばかりではなく、個人的感情をまじえた痛烈な非難も少なからずあつた。いま、それらの主なものを雜然と拾つてみよう。

Varnhagen von Ense は一八三六年六月十八日付のエッカーマンへの手紙で「對話」の出現を „ein ordentliches Ereignis“ と呼び „Es ist ein Lebensbuch, weil es aus dem Leben kommt und ins Leben geht: Goethes Macht und Aussehen tut sich darin auf das Herrlichste dar.“ とたたえている。

Riemer は „Mitteilungen“ の Vorwort のなかで „Dr. Eckermanns Gespräche dürfen, wenn auch mit einiger Kunst geordnet,....doch in Sinn und Ausdruck vollkommen wahr und zuverlässig, für authentisch gelten.“ と評している。

Franz Grillparzer はまた次のようなすこぶる穩當な意見をはいている。「エッカーマンの書物はゲーテの本質を知るうえに、この上もない價値をもつている。しかし、個々の言説を、それが何時また誰に向つて語られたかを考えずに、全體のつながりから切りはなして受取ることは用心しなければならぬ。」

Heinrich Laube は ,, Ich fand den alten Herrn darin gerade so, wie ich mir ihn immer vorgestellt, so gesund und weise; die Lektüre für mich ein wahres Entzücken gewesen." と述べてゐる。

Heinrich Heine はエッカーマンのことを Goethepapagei などと呼んでしばしば揶揄してゐるが、一八五一年、病床に於て「對話」の一、二部を繰返し讀んで ,, wahrhaft pomadiges besänftigendes Vergnügen" を見出し、ある友人にその閲讀をすすめてゐる。

また近代に於ては Friedrich Nietzsche が ,, Menschliches, Allzumenschliches. II. 2. Abt. 109" に於て ,, Wenn man von Goethes Schriften absieht und namentlich von Goethes Unterhaltungen mit Eckermann, dem besten deustschen Buche, das es gibt: was bleibt eigentlich von der deutschen Prosa-Literatur übrig, das es verdiente, wieder und wieder gelesen zu werden?" と言つてゐることは周知の事實である。

しかし、「對話」に對してはまた可なり痛烈な非難攻擊も行われたのであつた。

たとえば Ludwig Börne は ,, Götzendienst" だとの酷評を下し、Nikolaus Lenau は ,, Eckermann und Goethe,/Blaserohr und Flöte" と面白く韻を踏ませてゐる。

また Friedrich Hebbel は「對話」をほとんど無批判的なゲーテ心醉の書だと非難し、同時にその經歷が少からず自分のそれに似ているエッカーマンが、ゲーテという大樹の蔭に心地よげに憩う樣や、師のゲーテからそつくり受けついだと思われるエッカーマンの明朗さを羨んだ。また一八三七年九月十三日付の Elise Lensing

宛の手紙のなかでは,,Er kommt mir vor, wie Adam, dem Gott der Herr seinen Hauch einbläst.“ と揶揄しているのである。

*

第一部、第二部の好評に氣をよくしたエッカーマンは第三部の計畫を立てた。これは彼の手許にある多くの資料とすぐれた記憶力に基づいて、先の二卷の補遺の形で出版されたものである。一八三七年七月二十七日に Brockhaus 書店に對してこの計畫を話し、贊成を得ている。しかし、ゲーテの遺稿の仕事に忙殺されたエッカーマンは早速仕事に取りかかることが出來ず、書店から催促をうけたほどである。また手持の材料だけでは不十分だつたので、それを補うために Friedrich Soret の手記を利用する許しを得た。ソレーはジュネーヴの人で、一八二二年ワイマルの大公殿下の教育監督として招かれていたが、ことに自然科學上の知識があつたために、ゲーテとも長く親交のあつた人である。そして、ゲーテとの親しい接觸を日記に書きとめていた。第三部の四分の一はソレーの手記によるもので、エッカーマンはそれに*印を付けて自分のと區別している。

エッカーマンは第三部の序文で「この長い間約束していて、やつと出來上つた私のゲーテとの對話を目の前に見ると、大きな障害にうちかつたというよろこびを禁じえない。私の立場は非常に困難であつた。…最初の二卷を書き上げたときは、…聞いたばかりの言葉がまだ耳許にひびいていた。…そのために翼に乘つて目的地へ運ばれるような氣がした。しかし、あの聲もすでに長年この方消えうせ、親しく相見るあのよろこびもはるかに遠ざかつた今では、沈思默考して過去をまざまざと想いうかべることの出來る時にのみ過去がよみがえりはじめ、彼の偉大な思想と偉大な面影とが…目のあたりに浮かんだ時にのみ、必要なあの感激を得ることが出來

た」と書いている。

このような困難と戰いつつエッカーマンは第三部を書き上げたが、出版に關してブロックハウス書店との間にいざこざが生じ、結局一八四八年に Heinrichshofensche Buchhandlung Magdeburg から出版された。しかしこれも一八六八年になつて、再びブロックハウス書店から第三版として出ることになつた。

ここで、なお計畫のみに終つた第四部のことを簡單に述べておこう。第四部の計畫はすでに一八四八年に立てられていたらしい。一八五一年の手紙によると、第四部では「ファウスト第二部」の成立をめぐるゲーテとの間の會話を主に取扱うつもりだつたらしい。一、二、三部と合わせて、まとまつた本にして、同じ出版社から出す計畫であつたが、話合いがつかなかつた。仕事が順調にはこべば、一八五四年の春には出版できる豫定だつた。ところが、一八五四年の一月にエッカーマンは病氣にかかり、一旦よくなつて仕事を始めたが夏以來また容態は惡くなり、ついに十二月三日に不歸の客となつた。そのため、第四部はわずか斷片の形でのこつているにすぎない。エッカーマンの死はまことにおしい。ことに「ファウスト第二部」の成立について、色々と問題の解明に資したであろうことを考えると、かえすがえすもおしまれる。

*

次に「對話」がどの程度まで眞實を傳えているかという問題を考えてみよう。これを裏書するものは先ずフォン・ミュラー翰長の言葉である。彼は一八三六年三月二十九日、「對話」の出版以前に原稿と作者の朗讀とでその內容を知つたとき、次のような意見を述べている。,, Herr Dr. Eckermann hatte als mehrjähriger treuer Tisch- und Arbeitsgenosse Goethes nicht nur die beste Gelegenheit zu den Aufzeichnungen seiner Ge-

spräche, sondern die kindliche Unbefangenheit, die klare Auffassungsgabe, mit welcher er den Reichtum der Goetheschen Mittheilungen in sich aufnahm — in ein reines durch System- und Parteisucht noch völlig ungetrübtes Gemüth — bürgen uns auch dafür, daß das mit möglichster Treue alsobald Niedergeschriebene unvermischt geblieben mit fremdartigen Zusätzen und Vorstellungsweisen. Hätte doch seine Pietät für Goethe ihm am wenigsten jemals erlaubt, anmaßlich zu deuteln und zu klügeln, wo es ihm gerade als höchstes Verdienst erschien, Sinn und Worte des verehrten Meisters in voller Lauterkeit und Unschuld wiederzugeben!" ゲーテを知りぬき、自分でもゲーテとの談話を著わしてゐるミュラー翰長の言には一應信を置くべきものであろう。

「對話」の眞疑を檢討する材料となるものは、先ずゲーテの日記と手紙であり、エッカーマン自身の日記及びその他の人々の記錄である。しかし、ゲーテ自身の日記にも間違いがないわけではない。ことに晩年には口述筆記をさせるならわしであつたし、それがその日のうちに淸書されたわけでもなく、いちいちゲーテがそれに目を通したとも考えられず、誤りの生じる可能性は多分にある。事實 Houben などの研究によると、ゲーテの日記とエッカーマンの日記とでは、記載の事實に可なり相違があるらしく、「對話」に關する限りでは、エッカーマンの日記の方が記事も豐富である。エッカーマンの日記では「對話」に用いた記事だけが鉛筆で消され、使われなかつた、とくに私事に關する記事はそのままのこされているという。この點ではエッカーマンの日記の方がゲーテの日記以上に「對話」研究の貴重な資料となるわけである。

この問題に關してはPetersenが„Die Entstehung der Eckermannschen Gespräche und ihre Glaubwürdigkeit" に於て克明な研究を行つてゐる。彼によると「對話」のなかで日付及び內容の點で全く信頼しうるも

のはわずかに三分の一程度だという。そして彼は「對話」を次の六つの層（Schichten）に分類している。

(一) Tagebuchaufzeichnungen in Rohform.　あらゆる點で信頼しうるもの。

(二) Wörtliche Aussprüche ohne Umgebung.　その言葉だけは信頼しうるもの。

(三) Ausarbeitungen ursprünglicher Tagebuchaufzeichnungen.　時日は信頼出來ても內容は多少疑わしいもの。

(四) Zusammengesetzte, zerlegte und verlegte Gespräche.　內容は信頼出來ても時日は疑わしいもの。

(五) Benutzung fremder Materialien.　そのままは信じられぬもの。

(六) Erfundene Gespräche.　あらゆる點で信頼出來かねるもの。

そしてペーターゼンは一つ一つの記事について嚴密な檢討を加えている。

故にエッカーマンの書きしるしているゲーテの言葉が、以上の何れの層に屬するかをよく吟味した上でなければ、直ちに信頼は出來ない。二人の對話がいかにも均衡を保ち、みごとなまとまりを見せているような場合はその信頼性はうすい。ゲーテもエッカーマンも、共に言葉すくなく語る時は眞實で、長々と喋るときは一應あやしいと言うことになる。しかし、本當にゲーテが口にした權威ある言葉よりも、むしろエッカーマンがゲーテに代つて語つた眞實ならぬ言葉の方に、反つて生命力と說得力があるかもしれない。

ペーターゼンもまた次のように說いている。先の六つの層が順を追うて biographische Tatsächlichkeit からの後退を意味するとすれば、それはまた同じ順序に從つて Materie から Geist へ Stoff から Gestalt へ Chronik から Mythos へ passive Registratur から schöpferische Anschauung へ zerstreute Vielheit から lebensvolle Einheit へ zufällige Wirklichkeit から künstlerische Wahrheit への前進を意味する。

してみると、正しい記錄が必ずしも高い價値をもつわけではなく、眞實ならぬ記錄も直ちに無價値であるとは言いえない。たとえ間違つた事實や疑わしい記述がどれほど多くても、エッカーマンの「對話」の價値を全面的に否定することは許されない。それらの疑わしい個所も、ゲーテ自身の證言によつて見事に確められるし、他の信頼すべき個所によつて十分につぐなわれるからである。

*

はじめてエッカーマンの「對話」を讀むと、そのすばらしさに惹きつけられるが、幾度も讀みかえすうちにその魅力はうすれ次第に缺點も目について來る。ペーターゼンのようなこまかい詮索をまつまでもなく、第一部、第二部と第三部との間の相違に氣づくことが出來る。第一部、第二部には、たしかにまだゲーテ自身の對話という感じがあるが、第三部になるとエッカーマン的色彩がきわめて濃厚となり、エッカーマンが勝手氣儘にふるまつているという感がふかい。さらにまた「對話」があまりにも整ひすぎ、ゲーテを美化しすぎていることなどにも氣付くのである。

エッカーマンは、いつたいどういう態度で「對話」を書きとめたのであろうか。彼は普通考えられているような單なる速記者ではない。ゲーテの話をその場で、機械のように一字一句のこらず記錄したのではない。ゲーテのもとから歸宅するや直ちに机に向つて、聞いて來た話を書きとめることも、必ずしも出來なかつたであろう。時に筆の澁滯することもあつたであろうし、用事にさまたげられて、心ならずも幾日も筆をとらずにすごすこともあつたであろう。彼は、一行も書かずに半年もすぎたこともある、と告白しているほどである。彼はゲーテから聞いた話を、日をへてのち自分の考えに從つて適當に取捨選擇しながら、書きとめた。それ故ゲーテの言葉

が、正確にその語られた日に記載されているかどうかは疑わしい。ゲーテは同じ事、似たような事を幾度語つたかしれない。しばしば話題となつている「色彩論」や「ファウスト第二部」などは恐らく百回以上も語られたであろう。故に、それはエッカーマンの血肉となり、記憶の母體となつている。ゲーテの考え方、表現法がすつかり身についてしまつて、いわば第二の天性とさえなつている。そのように繰返して聞いた上で十分に成熟させたものを渾然たる姿で書きとめたのであつて、決してきれぎれの記錄の集積ではない。彼は編年史的傳記を目論んだのではない。彼の態度は、ちようど歴史小說作家が必ずしも杓子定規に史實に忠實に書かぬのと同じである。人はゲーテが「詩と眞實」を書いたときの態度を考えてみればよい。「對話」は單なる事實の記錄ではなく、崇敬する師の本質的な理解に基づいて、純化された眞實を傳えるところの一つの藝術的作品なのである。

エッカーマンは實に再現の天才（Genie der Reproduktion）であつたということが出來る。そのことは第三部にある一八二八年三月十一日の記事が何よりも證明している。エッカーマンの日記にはただ „Abends bei Goethe, interessantes Gespräch, Produktivität, Genie, Napoleon, Preußen.“ としか書かれていない。これが十數年の間に心の中で立派に成熟して、思想的にも文體的にも發展をとげて、あのような十數頁にもわたる見事な對話となつたのである。エッカーマンはこれに關して、「むろん容易なわざではなかつた。この一日の對話を書くために、まる四週間をついやした」とほこらしげに告白している。これは實に、われわれにエッカーマンの藝術工房を示してくれる。このつつましいゲーテの聞き手は、たんに歴史家であつたばかりでなく、また形成的藝術家でもあつた。たんにすぐれた記憶力によつて、ゲーテのきれぎれの言葉を傳えようとしたのではなく、ゲーテの精神的態度、およびゲーテをとりまく全體的雰圍氣を描こうとした。彼がゲーテから受けとつた印象を廣く人々に傳達し、その影響を永く後世にとどめようという目的で仕事をしたのである。

「對話」のすばらしさはいつたい何處から來るのであろうか。內容の豐富さと形式の見事さは何から來るのであろうか。それは先にも述べたように、同一の問題を幾度となく語りあい、長年かかつて考えぬき研究しつくしたあげく、それを見事にまとめた編集のうまさと表現の巧みさから來るのである。しかし、それには並々ならぬ才能が必要であつた。ファルクにも、リーマーにも、ミュラーにもそれは缺けていた。エッカーマンはニュアンスに富んだ樣々の氣分を、すばやく感じとるするどい感覺をもつていた。樣々のシチュエーションを見ぬく目をそなえていた。同時にまた、日記の祕密と手紙の告白とを「對話」のなかで巧みに結合する術をも心得ていた。最も手近なものを、再び藝術的彼方へ押しやる術も心得ていた。このような技術と、瞬間のデリケートな魅力を言葉に把握する才能とを彼はあわせそなえていた。彼は實に言葉の名手であつた。このような敍述の骨を彼は外ならぬゲーテから學んだのである。

たとえば、ゲーテの肖像畫の數はすこぶる多くて、その何れがゲーテの眞の姿なのかわからぬほどである。ただ斷言できるのは、その何れの一つもゲーテそのものではあるまいということだ。およそ寫眞とか肖像畫とかいうものは一瞬の靜止せる姿をうつし取つたもので、映畫のそれには及ばぬものだが、對話はたとえていえば映畫に於けるように、その折々の姿を樣々にうつしたものと言うことも出來るであろう。また對話の魅力は、つね日頃、たとえば作品を通して間接にしか知りえない偉人と、直接相對坐して語りうる親しさにある。直接私生活のなかにとびこんで、普段着の姿に接しうる點にある。讀者に對して、これこそ最もプライベートな體驗だ、という印象を與える點にある。エッカーマンの「對話」が長くその生命を保つ理由の一つはここにあるのであろう。

またエッカーマンはゲーテをあまりにも美化しすぎている。あまりにも調和のとれた、理想的な姿に描きすぎている感じがする。ゲーテとても不機嫌にだまりこくつたり、氣むずかしく腹を立てた場合もあつたであろう

のに、「對話」に於ては、ゲーテは何時も「ことのほか上機嫌」で、「すこぶる愉快に」語つている。この點では、ゲーテの言葉をなんの修飾も加えずに、生のままに書きしるしたミュラー翰長の對話の方に、かえつてゲーテの怒りの氣分や、皮肉の調子がじかに出ているように思われる。しかし人は誰でも、自分の姿を美しくうつしてくれる鏡を好むものであるが、いわばエッカーマンはゲーテを最も調和ある、美しい姿にうつし出す鏡であつた。ゲーテとてももとより悪い氣持はしなかつた。そして、エッカーマンが讀者に大變うけた理由の一つはここにあるかもしれない。何故ならば、讀者が偉人に對して求めるものはその眞實の姿ではなく、むしろ美化された姿である場合が多いからである。つまり讀者の欲するものは眞實ではなくて、小說であり、神話であるからだ。

さてエッカーマンの「對話」は、嚴密なゲーテ研究のための書としては可なり缺點に富むものであるが、その資料としての價値が減少すればするだけ、かえつて個性的な、獨自な作品としての藝術的價値は高まるわけである。まさしく、表題の示すようにエッカーマンの「ゲーテとの對話」であつて、よく言われるようにゲーテの書ではない。「これこそ私のゲーテだ」と主張する權利をエッカーマンは持つている。あるいは、エッカーマンの書いたゲーテ小說ということが出來るかもしれない。ゲーテ自身その對象となり、素材となりながら、その成立を樂しげに見やり、時には樣々の忠言を與えつつ出來上つた小說である。彼はそのなかで、ウィルヘルム・マイスターよりもさらに生氣ある、ファウストにも比すべき姿に描かれている。そして、これがゲーテの死後に發表されたという事情は、「對話」を一種の福音書としている。ゲーテは「對話」が生前に發表されることを賢明に引きのばすことによつて、後世に自分の姿を信じこませようとしたとも考えられる。

*

最後にエッカーマンの身分の問題にふれてみたい。エッカーマンは從來そう思われているように、ゲーテの秘書（Sekretär）ではなかつた。彼は後年この誤解に對してしばしば抗議を行つている。

一八三八年、ブロックハウス書店が、百科辭典のゲーテの項目に付錄としてそえるために、エッカーマン自身の簡單な傳記を求めたとき、彼はこの取扱い方に不滿を抱き、十二月二十七日付の手紙で次のように答えている。「世人は私がゲーテの秘書であるように噂し、また公言しているが、それは正しくない。それは事情に通じない、私とゲーテとの本當の關係を知らぬ者の言である。私のゲーテに對する關係は弟子（Schüler）として、協力者（Mitarbeiter）として以外の何者でもない。そして、この關係は私にとつて隨分費用のかかるものだつた。というのも私はずつと自費で生活して來て、時たまゲーテと食事を共にしたり、會合の仲間入りをしたりするのが樂しみといえばいえるくらいのものだつた。尤もその際得られる精神的な利益は大きかつたけれども。」

また一八四四年三月五日付のラウベ宛の手紙に於ても同樣の意見をのべている。特にこの手紙は彼がゲーテのもとで果した役割を十二分に物語つているので繁をいとわず原文を引用することにする。

„Ich sehe, daß man mich in Ihrem Kreise (dem des ‚Jungen Deutschlands') als Goethes Sekretär bezeichnet hat. Hieran ist kein wahres Wort. Es ist so wenig Goethen als mir je eingefallen, sein Sekretär zu sein. Ich war ebensowenig Goethes Sekretär als Shelley der Sekretär von Lord Byron war. So lange ich in Weimar lebte und in das Goethesche Haus Zutritt hatte, hieß Goethes Sekretär John. Es war dies ein schön schreibender, junger Mann, dem Goethe diktierte und der das durch Riemers Hilfe korrigierte Manuskript ins Reine schrieb. Mein Verhältnis zu Goethe war eigentümlicher Art und sehr zarter Natur. Es war das des Schülers zum Meister, das des Sohnes zum Vater, das des

Bildungs-Bedürftigen zum Bildungs-Reichen. Ich sah ihn oft nur alle acht Tage, wo ich ihn in den Abendstunden besuchte, oft auch jeden Tag, wo ich mittags mit ihm, bald in größerer Gesellschaft, bald tête-à-tête zu Tisch zu sein das Glück hatte. Doch fehlte es unserem Verhältnis auch nicht an einem praktischen Mittelpunkt. Ich nahm mich der Redaktion seiner älteren Papiere an, ich assistierte ihm bei der im Jahre 1826 begonnenen Herausgabe seiner Werke in vierzig Bänden; auch nahm ich teil an „Kunst und Altertum", wozu ich ihm einige Beiträge gab. Er dankte mir seinerseits dadurch, daß er mich in seine Kreise zog und an den geistigen und leiblichen Genüssen eines höheren Daseins teilnehmen ließ."

それ故、彼が「對話」のなかに於ても、ゲーテに對する彼の關係が獨立した自由な一人の協力者であり、若き一人の友人であると主張しようとする努力がみられるのは當然である。時にはそれが幾分露骨に示されることがある。ゲーテと彼とを最も密接に結びつけているところのもの、卽ちゲーテの仕事の手傳いについては、ごくわずかしか記述していないが、これは恐らくゲーテ家に於ける彼の地位が不當に低く見られない爲の心ずかいからであろう。作品に關してエッカーマンが詳しく語っているのは、たとえば「ヘヴェン」や「詩と眞實」の完成の場合のように、ただ彼がゲーテの激勵者、忠言者であるときか、「俳優規則」„Regeln für Schauspieler" やゲーテの手紙の出版計畫についての場合のように、その整理が彼に一任されたような場合に限られている。これらの例はすべてエッカーマンがゲーテの書記とみなされないで、友人と考えられることをどんなに望んだかを示している。事實ワイマルの新墓地の彼の墓標には „Hier ruhet Eckermann, Gothes Freund" とかかれている。

實さい彼は「對話」を書いたばかりでなく、ゲーテの創作活動に對しても直接影響するところが多かつた。彼の任務はたんに原稿の整理、資料の蒐集に止らず、忠言者であり、激勵者でもあつた。彼なしには斷片に終つたかもしれないものが、彼のおかげで數々完成している。たとえば「ファウスト第二部」、「詩と眞實」などがそれである。ゲーテ自身もその事を認めて、ミュラー翰長の „Unterhaltungen“ の一八三〇年六月八日の項に於て「わたしがファウストを書き續け、第二部の最初の二幕がほとんど完成したのは、主としてエッカーマンの御蔭である」と述べている。

結果論的に言えば、エッカーマンの名が後世に傳わつたのは、ひとえに「對話」によつてであり、恐らく彼の詩作によつても、評論によつても名聲を得ることは困難であつたろう。ゲーテは創作で立とうという彼の夢を無慙にも踏みにじつてしまつた。この行爲はまことに冷酷ともみえ、エゴイスティクとも考えられる。しかしこの方が結果から言えばエッカーマンにとつて幸福だつたであろう。文學の大道に出れば彼はやがて落伍したかもしれないのである。しかしながら、エッカーマンを目して全く無批判、無抵抗な機械の如き存在と考え、ただ唯々諾々とゲーテの言葉を記錄した職業的書記にすぎぬとする考え方は不當である。從つて「對話」をエッカーマンの書でなくて、ゲーテ自身の書であると見なす考えも正しくない。ゲーテをしてあのように見事に語らしめたのは全くエッカーマンの手腕によるのであり、彼の身にそなわつた人格の賜物なのである。俗に話し上手に聽き上手という言葉があるが、ゲーテは、エッカーマンという無類の聽き上手に惠まれたおかげで、あのような形で晩年の姿を後世に傳えることができた。その功績は當然エッカーマンに歸せらるべきものであろう。恐らくゲーテとエッカーマンの優劣論を大まじめにやる人はなかろうと思うが、よくエッカーマンを愚直の標本のように言い、彼からゲーテを取り去つたならば、いつたい後に何がのこるかという論をなす人があるが、これは無意識

のちにこの優劣論を行つているにも等しいもので、こう言う人自身はゲーテに近い存在と自負しているのかもしれないが、案外このような人はエッカーマンの足許くもよれない人間なのかもしれない。

（一九五四・十一・二五）

エッカーマン著作目録

Gedichte. Auf Subskription gedruckt. 1821.

Beyträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe. Stuttgart 1824.

Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens, Bd. 1-2. Leipzig 1836. Bd. 3. Magdeburg 1848.

Gedichte. Leipzig 1838.

Zahlreiche Aufsätze in „Kunst und Altertum" und im „Morgenblatt".

Goethes Faust am Hofe des Kaisers. In 3 Akten für die Bühne eingerichtet. Aus Eckermanns Nachlaß hrsg. von Friedrich Tewes. Berlin 1901.

Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß. Hrsg. von Friedrich Tewes. 1. Band, Berlin 1905.

参考書目

J. P. Eckermann: Gespräche mit Goethe. Neu hrsg. v. H. H. Houben. 1949.

〃 : Beiträge zur Poesie mit besonderer Hinweisung auf Goethe. Hrsg. v. Karl Georg Wendriner. 1911.

Goethes Gespräche. Neu hrsg. v. Frhr. v. Biedermann 5 Bde. 1909.

F. W. Riemer: Mitteilungen über Goethe. Hrsg. v. Pollmer. 1921.

Goethes Unterhaltungen mit dem Kanzler Friedrich Müller. Hrsg. v. Albrecht Knaus. 1948.

Julius Petersen: Die Entstehung der Eckermannschen Gespräche und ihre Glaubwürdigkeit. 1925.

H. H. Houben: J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. 1925.

〃 : Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen. 1934.

R. M. Meyer; Gestalten und Probleme. 1905.

Ernst Beutler: Essays um Goethe II. 1947.

Josef Hofmiller: Wege zu Goethe. 1949.